

牧師室から (2022.1.23)

スーパーでカリフラワーとブロッコリーが並べてあれば、大抵の人はブロッコリーに手を伸ばすのではないだろうか。二つともライバルであるが、どうもブロッコリーに軍配が挙がりそうである。何となくカリフラワーが可哀そうだと思っていた。

ところがこの寒い時期にそれらを仲裁するような野菜が出る。ロマネスコだ。二つを混ぜ合わせたような感じであるが、その形態がなんとも魅力的なのである。私は好きだ。ちょっと専門的に言うならばフラクタルと言って、自己相似的である。しかしそれだけではない。螺旋状にうねるような形態はフィボナッチ数列と一致する。

フィボナッチ数といえば、例えば花びらや葉の数についてもよく言及される。花びらの数について関連があるとしたら、乙女の恋の花占いであろう。占いといっても遊びのようなものと言えるが…。「好き、嫌い、好き、嫌い・・・」乙女はその切ない気持ちを花びらに託す。考えてみれば、よほどへそ曲がりでなければ、「好き」から始めるので、奇数ならばラッキーで、偶数ならばアンラッキーであることはわかるはずだ。それならば予め奇数と分かっている5枚の梅や桜を選べばよいと思うのだが、一目で結果がわかるようでは有難味がないのであろう。さりとして一般の菊のように花びらが多いものでは、最後までやり抜くには根性というか、情熱がかなり必要である。大抵の女の子は途中で、もうどうでもいいやと投げ出してしまうのではないか。あるいは最初からそのような花は選ばないかであろう。だからマーガレットやガーベラぐらいが、花びらの数としてはそのようなことをするのに程よいのであろう。ところが私が思うに、一番注意しなければならないのがコスモスである。秋も深まったころ、心もとない乙女が可憐なコスモスを手折って恋の行方を問うてみる。しかしコスモスは例のフィボナッチ数列に従って8枚の花びらなので、哀れにも悲しい結果となる。恋する乙女はコスモスで占いをしないほうがよさそうである。純真な乙女の恋心を支配する、自然のうちに潜んでいる数学とは、科学の言、言わば自然科学のロゴスであると言えるのではないか。

(鈴木淳一牧師)